

## 落ちたパンを拾って食べる

ㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

ポリ袋に入っていた五、六個の菓子パンを妻が床にばらまいてしまった。チョコレート入りの細長いパンで、表面は柔らかく、オイルが塗られているせいか、いやにベトベトしている。

「どうしよう。勿体ないわ」と妻は私に助言を求めた。こんなベトベトのパンが床に転がったら、埃やゴミや毛髪などをたっぷり付着させることは間違いなかった。床に触れた部分を削り取って使おうかという妻の案を斥けて、私は即座に、全部捨てたほうが良いと答えた。

床に触れた部分といっても、どこから落ちて、どう転がったかなどということの子細に見ていたわけではない。どこを削ればいいのか今さら分かるはずがないし、また、そんなことをすれば、ますます汚れを増やし兼ねない。

そのほか、パンを水で洗うとか、アルコール除菌液を噴霧するとか、色々なアイデアが無かったわけではなかったが、結局のところ、「勿体ないけど」、こういう時は捨てるしかないという結論に至ったのだった。

思い切って捨てた方が、今後は用心深くなって落とさなくなるのではないかななどと、未練たらしいことまで口にしながら、妻と一緒に後片づけをした。

五、六個の菓子パンを床から拾ってゴミ箱の中に放り込む。何か生きたものをむりやり捨ててしまうようなイヤな感じが残るのだ。

私は、戦後の食糧不足の時代に育ったせいか、食べ物を捨てるということには非常に抵抗感がある。おそらく妻もそうなのだろうと思うのだが、普段は、私よりもよっぽど気前よく何でも捨ててしまう。ちょっとカビの生えてるのを見つければ、高価な食料品でもさっさと処理してしまう。

これは、食中毒の怖さを知っているからなのであろう。しかし、今回のように、充分食べられる新鮮なものを、ちょっとしたミスで汚してしまった場合、妻がためらう気持ちもよく分かるのだ。

それに、彼女の最終的な答も分かっていた。私が即座に捨ててしまおうと言ったのは、彼女の答を先取りしたからにはほかならない。要するに、私の妻は、落として汚れた食べ物をどうするか悩みはするが、結局は捨ててしまうのが常なのだ。

私の母も同じだった。食糧不足の時代でありながら、私が地面に落としたお菓子を拾おうとすると、こっぴどく叱られた。畳に落とした食べ物も、救いようのないものについては同じだった。

そんな母が、茶碗にゴハン粒を残すことをひどく嫌ったのは面白い現象だった。何でも、日本人がお米を研ぐ時に流してしまう米粒や、食べ残しのゴハン粒を集めると、膨大な量になるそうだ。

「こんなムダなことをしていたら、お百姓さんに申し訳ない」というのが母の口癖だった。

「茶碗によそったゴハンは、最後の一粒まで、キレイに食べなければならないのよ」

私は、このように米の一粒まで大事にする一方で、地に落ちた食べ物は、「勿体ないけど」、口まで持って行ってはならないという考え方に、日本人独特の清潔感を見たような気がしたものである。

と言うのも、私は、フランスで生活している間に二度ほど、母親が娘に食べ物を拾わせている光景を目にしたからである。

その一つは、少女が床にキャンデーを落とし、泣きそうな顔をして母親を見上げているのに対して、「拾いなさい」というのが母親の答だった。少女がキャンデーを拾い、再び舐め始めるところまでは見てもいなかった。

もう一つは、まったく同じような状況だったが、娘が拾い上げたキャンデーを母親が取り上げ、ハンカチか何かで汚れを払い落としてやった後で、再び娘に手渡すという光景だった。

こちらのほうがいくぶん母親の優しさを感じさせはするものの、清潔感ということではあまり変わりがないように思えた。

この母親たちが、食べ物を大事にするという出発点に立っていることは変わらないであろう。それと同時に、せつかくお金を払ったものなのだから、そのまま捨ててしまうのは勿体ないという気持ちがあったかも知れない。清潔感はおそらく、それを越えるものではなかったのであろう。

と言うよりは、そもそも清潔感などというものがはっきり意識されたのかどうかも疑わしい。欧米人には、床との接触をそれほど不潔とは感じないところがある。最初の母親は、娘のキャンデーが床に触れたことなどまったく意に留めなかったし、二番目の母親は、その汚れを払い落とせば問題はないと思ったに違いない。

私がこの光景を目撃したのは、いずれも「ピカール」という冷凍食品を売るチェーン店で、普通のスーパーよりは客層の良いところである。床もスーパーよりはキレイだが、みんなが土足で歩いていることには変わらない。

パリは多民族の町なので、これでフランス人一般の清潔感を判断してはならないのだが、こういうことがまかり通り、周囲の人もあまり気に留めないというところに、日本とは異なる清潔感の有り様を感じてしまうのであるが、どうであろう。

あなただったら、こういう場合、どうするだろう。幼い子供が、手にしているお菓子をうっかり床や地面に落としてしまった。あなたはそれを拾って、再び子供に持たせられるであろうか。

私は、日本の母親がこういう時にどんな行動を取るのかあまり知らないのですが、何とも言えないのだが、おそらく日本人には容易にはできない行動のパターンなのではないかと思うのである。

もちろん、家の外と家の中では状況も変わってくるし、落としたものの状態によっては、拾ってもおかしくないといった時もある。しかし、日本人に特に目立つのは、他者の目を意識するところではないだろうか。

家庭内ではできることでも、衆人環視の中ではできないことが多い。落としたものが充分救いよ

うのある場合でも、人の見ている前では、それを拾うことを潔しとはしないような気質があるのだ。

パリのセントノレ街にあった「大心」という日本料理店のシェフで、カウンターで寿司を握っていたNさんは、食材が調理台から落ちただけでも、あっさりゴミ箱に捨ててしまう。美味しそうなエビの身をポンと放り投げるのを見て、フランス人の男性客がいかにも惜しそうな顔をして、肩をすくめていた。

(パリの寿司職人のことについては、拙著『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』ビワコ・エディション版37頁以下にも書いた)

私は、このNさんの態度に、日本人独特の清潔感というか潔癖感というか、清浄と不浄をはっきり区別する気質を見たような気がしたのだが、これはちょっとフランス的な清潔の意識とは異なると思ったものである。お客を前にしたデモンストレーションだと言ってしまえば簡単だが、ただそれだけではないようなものを感じたのだ。

もう一つ、私がパリのレストランで経験した奇妙な出来事を思い出すのだが、このことをどう理解してよいのか未だに判らずにいるのだ。

夕食時になると、近くの役所勤めの人が押しかけてくるかなり大きな店なのだが、その人たちに混じって私と妻が食事していると、女店員がクルワッサンを運んできた。私たちの籠にそれを入れていた最中に、一つを取り落として、床に転がしてしまったのだ。

私も妻も、思わずそのパンの転がるのを目で追ってしまった。女店員は、パンを持って帰るつもりらしく、床から拾って盆の上にじかに乗せたのである。

その時、私たちの隣にいた中年の女性が腕を伸ばして、女店員の盆からそのパンを摘み上げ、おもむろにちぎって食べ始めたのだ。

彼女が故意にそういうことをやっていることは、その表情を見れば明らかだった。彼女は私たちに目を注いだまま、ゆっくり口を開けては、パンを噛んでいる。

クルワッサンの表面はベトベトしていて汚れやすい。しかも床の上を転がったあとである。それを、埃を払いもせず、わざわざこれ見よがしに食べてみせたこのフランス人女性の真意が何だったのか、未だに判らずにいる。私たちに何かを教えようとしたのだろうか。

ただ、このことから判った唯一のことは、彼女の清潔感の有り様が私たちとはまったく異なるということである。私の母は、一度地面に落ちた食べ物を拾うことは決して許さなかった。そこには、清潔感に加えて、何か他の要素があったように思えるのである。

それは、日本伝来のケガレの思想ではないだろうか。口に触れる清浄なものと地に落ちた不浄のものを区別しなければならないというタブーの意識である。

母の場合、人目があろうがなかろうが変わらない鉄則であったが、これは本来、人と物との間のみ成立する単純な清潔感ではなくて、何らかの形で第三者の目を必要とする意識である。

私たちがケガレのないことを見せ、また見てくれる他者の目、絶対者の目があったこそ初めて成立するのがケガレの思想である。母の意識の中にも、このような他者の目があったことは間違いがない。

このことについては、また稿を改めて述べることにしよう。

[2007/10/09 magmag]